

プロローグ

アメリカは白人中心の国ではなくなるのか

移民大国アメリカは現在大きく変貌しつつあり、移民の受け入れをめぐっても大きく揺れ動いている。一九六五年の移民法改正以降、二〇世紀末から二一世紀初頭にかけてアジア、ラテンアメリカ、カリブ海から平均百万人にもぼる移民の大波が毎年今日のアメリカに押し寄せてきている。この結果、アメリカの人種民族構成に大きな変化が生じ、これまでマジョリティの座を占めてきたヨーロッパ系白人の人口は減少傾向にあり、これとは対照的にラテンアメリカ、カリブ海、アジアなど非ヨーロッパ諸国出身者の人口は伸び続けている。米国情勢調査局の人口動態予測によると、二一世紀半ばまでには白人人口が合衆国総人口に占める割合は過半数を割り込み、白人がマジョリティの座から転落することは確実と見なされている。この結果、アフリカ系アメリカ人（黒人）、ラテンアメリカ系のヒスパニック（あるいはラティーノ）、アジア系アメリカ人などマイノリティ・グループの人口を合計すると、マジョリティになるとの予測がなされている。この結果、マジョリティであった白人がマイノリティに転落し、それに代わってマイノリティであった非白人グループがマジョリティの座に就く可能性が想定されている。かくして、アメリカ建国以来アメリカを牽引してきたワスピの権威が崩れ、その影響力も影が薄くなり、ヨーロッパ系白人中心の白いアメリカは過去のものになりつつある。

アメリカは（メルティングポット）ではなくなったのか

アメリカ合衆国といえば多民族・多人種からなる（人種のるつぼ）、すなわち（メルティングポット）であるというのが常套句であった。多民族・多人種社会アメリカのシンボルとして長いあいだ人口に膾炙した（メルティングポット）であったが、いつの頃からかこのシンボルは移民に一方的かつ強制的にアメリカのメインストリームの文化——それはアングロサクソン系でプロテスタントのミドルクラスの白人を核とする文化であった——に同化することを迫る非寛容な同化主義のイデオロギーであると批判が高まった。その結果（メルティングポット）はすっかり評判が悪くなり、それに替わるアメリカのメタファーとして（サラダボウル）

もしくは〈モザイク〉などの新しいメタファーが台頭してきたのである。

この変化の契機となったのは、一九五〇年代から六〇年代にかけてのアメリカ南部における公民権運動の高まりであった。マーティン・ルーサー・キング牧師に指導された人種差別撤廃と黒人の地位向上をめざすこの運動のめざましい成功から刺激を受け、アフリカ系、アメリカ先住民、ラテンアメリカ系（ラティーノ）、アジア系など非白人からなるマイノリティ・グループのエスニックな意識が高まり、それぞれの人種・エスニック・グループが自分たちの文化の特質であるエスニシティを失うことなく、それが全体の調和を構成する多様で複合的な多文化主義の国をめざすべきだという主張が強まると、〈メルティングポット〉に代わって〈サラダボウル〉というメタファー（隠喩）が使われるようになった。アメリカは〈メルティングポット〉なのか、それとも〈サラダボウル〉なのか、といった議論が盛んになされるようになったのである。

ところで、アメリカにおいて〈メルティングポット〉というメタファーが誕生し、それがアメリカのシンボルとして一般国民のあいだで広く受け入れられるようになったのはいつごろなのだろうか。本書では、かつて圧倒的なインパクトを持った〈メルティングポット〉というメタファーがいつごろ誰によって形成され、それが一般国民のあいだに広まった経緯を明らかにする。この目的のために、わたしたちは〈メルティングポット〉の系譜をたどることになる。具体的には、クレヴクルの『アメリカ農夫の手紙』、ターナーの「フロンティアⅡるつぼ」学説、ザングヴィルの戯曲『メルティングポット』を取り上げ、〈メルティングポット〉というシンボルないしメタファーがアメリカ社会において幅広い層に受け入れられていった経緯を歴史的背景のなかで探ることにはしたい。

過去の移民の歴史には三つの大きな波があった

「アメリカの歴史は移民の歴史でもある」といわれるように、アメリカ先住民であるインディアンを除いて、すべてのアメリカ人はすべて広い意味での移民（これには亡命者、難民、不法移民が含まれる）の子孫か、あるいはアフリカから強制的に連行されて来た黒人奴隷の子孫である。アメリカへの移民は植民地時代から今日にいたるまで、戦争、大恐慌、あるいは法律による移民入国規制措置などによって一時的に中断ないし大きく減少することはあったが、今日に至るまで多くの移民を毎年受け入れてきている。これまでにアメリカに世界中から押し寄せた移民の波を見ると、そこにはいくつかのピークがあるが、これらのピークのなかでもとりわけ大きかったのが次に見る三つの波である。

第一の大きな移民の波がアメリカに押し寄せたのは一七世紀から一八世紀にかけてであり、

これらの移民は当時ヨーロッパの先進地域であった北欧と西欧からの出身者で占められていた。これらの移民グループのなかでもとりわけ主流を占めていたのはイギリスからの移民であった。彼らはアメリカ東海岸のニューイングランドで国づくりをはじめアメリカの基盤を築いた建国の父祖、すなわちピルグリム・ファーザーズと呼ばれたピューリタン（禁欲的なプロテスタントの教派）であった。

第二の移民の大波は、一九世紀末から二十世紀初頭の世紀転換期に、南欧（南イタリア・ギリシヤなど）および東欧（ロシア・ウクライナ・ポーランド・ハンガリーなど）からの移民の大群であった。大西洋を越えてアメリカの東海岸に押し寄せたこれら新移民と呼ばれる人びとは、先述の北欧・西欧からの移民（旧移民）と同じヨーロッパからの移民であったが、宗教・生活習慣・言語を大きく異にし、貧困で低学歴であったために、激しい排斥運動のターゲットにされた。しかし当時のアメリカは第二次産業革命の最中にあつたために、工場、鉱山、鉄道建設、運河建設などの現場で単純肉体労働に従事する労働力に対する需要が高まっていた。当時のアメリカ国内の世論は、自分たちとは大きく異なる突然の移民の大群の出現に外国人恐怖が広まり、それが移民排斥や移民受け入れ制限の運動につながった。連邦政府としては、先住民の反移民感情の高まりにも関わらず、これら新移民をいかにしてアメリカ社会に受け入れ、アメリカ化するかという大きな政策課題を背負うことになった。

第三の移民の大波は、二〇世紀末から二一世紀初頭にかけて現代のアメリカに到来しつつあるラテンアメリカ、カリブ海、アジアからの大量移民の群れである。本書ではこれら現代の新移民を現代のニューカマーと呼ぶことにしたい。第一の大波と第二の大波はヨーロッパからの白人移民で占められていたのに対し、現代のニューカマーは非ヨーロッパからの非白人で占められているところにかつての移民とは大きな違いがある。これら現代のニューカマーの第二世代と第三世代は将来のアメリカ社会を担う存在になることはまちがいない。したがって、彼らが果たして今日のアメリカ社会にうまく同化を上げ上昇移動に成功して中流階級に仲間入りするか、それとも大都市のインナーシティに形成されているアフリカ系やプエルトリコ系などの黒人グループからなるブラック・アンダークラス（黒人最困窮層）に加えて、新たなアンダークラスを形成することになるかが、移民研究者のあいだで重要な研究課題となっている。

移民の同化には三つのパラダイムがある

移民の同化のプロセスを理論的に体系づけたミルトン・ゴードンによれば、アメリカの歴史的経験を通じて、同化のパラダイムは三つの主要な軸、すなわちアングロ・コンフォォミティ論、メルティングポット論、文化多元主義を中心に展開してきている。

第一のパラダイムであるアングロ・コンフォーミティ論は、英国の制度、英語、英国指向の文化パターンを、アメリカにおける支配的かつ標準的なものとして維持するのが望ましいという仮定を中心にすえている。したがって、新移民がアメリカ社会で社会経済的上昇移動に成功しメインストリームに受け入れられ、アメリカのミドルクラスの仲間入りするためには、彼らが祖国から持ち込んだ父祖伝来の言語・文化を完全に捨て去ることが求められる。ウィリアム・M・ニューマンは、アングロ・コンフォーミティ論の同化プロセスを記号化することで、それぞれの同化のパラダイムを公式によって説明している。それによればアングロ・コンフォーミティ論の同化プロセスは、 $A + B + C \parallel A$ という公式で表わされる。ここでAという記号が指しているのは、英領北アメリカ植民地に最も早い時期に入植し、自分たちのコロニーを築いていたイギリス系（イングランド人、スコットランド人、スコッチ・アイリッシュ人）のマジョリティ・グループである。そしてBとCという記号はイギリス系よりも遅れてアメリカに到着したほかのマイノリティ・グループを意味している。つまり、Aのグループはアメリカ植民地ですでに支配的地位を確立しており、イギリスから持ち込んだ言語・文化・宗教・価値観などに基づいた国づくりをおこなっていたのである。後発のグループであるBとCに属する人びとは、父祖伝来の言語・文化を捨て去り、メインストリーム（主流）であるA（イギリス系のグループ）の行動基準や価値観などを受け入れ、それに適応し、同化することで、メインストリームの仲間入りすることができるということを表している。

第二のパラダイムはメルティングポット論である。このパラダイムでは先住の支配的なアングロサクソン系の人びとが、アメリカという（メルティングポット）のなかで他の移民集団と相互に生物学的に融合（混血）し、それぞれの文化が溶け合うことで、それまでヨーロッパのどこにもなかった新しいアメリカ的な文化が形成されることがめざされる。すなわち、この同化パラダイムでは、アングロ・コンフォーミティ論とはことなり、新移民が一方的にイギリス系文化を核としたメインストリームに同化するのではなく、新移民グループ（具体的には、ドイツ系、イタリア系、アイルランド系、ロシア系など）と先住のアングロサクソン系の人びとが（メルティングポット）のなかで相互に対等に溶け合うことで変質し、新しい人間、すなわちアメリカ人が誕生することが期待されている。ニューマンの公式を援用するなら、メルティングポット論の描く同化プロセスは、 $A + B + C \parallel D$ という公式で表わされるだろう。ここではA、B、Cはそれぞれ異なるエスニック・グループを指しており、それらが融合することでDという新しい人間、すなわちアメリカ人が生まれることが想定されている。

第三のパラダイムは文化多元主義である。このパラダイムは、アメリカ市民として生活し

アメリカ社会への政治的・経済的統合を図るといふ文脈のなかで、あとからやってきた新移民集団のコミュニティ生活や文化のかなりの部分が保持されることを想定したものだ。アングロ・コンフォーミティ論や、メルティングポット論に比べて、文化多元主義は比較の後発のパラダイムであり、もっぱら二〇世紀の経験や反省のなかから生まれたものである。文化多元主義の描く同化プロセスをニューマンの公式で表わすと、 $A + B + C \parallel A' + B' + C'$ となる。この同化パラダイムは、アングロ・コンフォーミティ論やメルティングポット論が説く同化パラダイムは、アメリカ移民の同化の実態を正しくとらえていないと批判し、それらに代替するパラダイムとして新しく登場した。文化多元主義者であるホーレス・カレンは、アメリカに移住してきた新移民の多くは、彼らが故国から持ち込んだその民族に固有の文化や生活様式をすべて捨て去ることはしていないし、自分たちの大切なアイデンティティとして保持し続けていると主張する。ミルトン・ゴードンの指摘するように、文化多元主義は、理論となる前から——少なくとも、明らかに国民社会全体に行き渡り、英語を話すアメリカの知識人社会において明確に議論される理論になる前から——アメリカ社会における事実であった¹。

要するに、一九世紀のアメリカを特徴づけていたのは、次の二つの同化パラダイムであったことになる。第一のパラダイムであるアングロ・コンフォーミティ論では、ヨーロッパの後進地域からの非イギリス系新移民は、強制的同化政策によって先住のイギリス系住民の文化に一方的に同化することを迫られ、できるかぎりすみやかにアングロサクソン化することを要求される。これに対して、第二のパラダイム、すなわちメルティングポット論では、新移民に一方的な同化を迫るのではなく、さまざまなヨーロッパの遺産を持った人びとがアメリカという（るつぼ）のなかで溶け合って新しいアメリカ的文化タイプを創出することをめざす。二〇世紀のアメリカで、これら二つの同化主義的イデオロギーに反発して台頭してきたのが第三のパラダイム、すなわち文化多元主義あるいは多文化主義であった。

アメリカ化運動と（メルティングポット）批判の台頭

二〇世紀初頭に入ると南・東欧からの大量移民をいかにアメリカ社会に受け入れ吸収するかが連邦政府の政策課題となる。ときのアメリカ大統領シオドア・ローズヴェルトは、ワスプと呼ばれるアングロサクソン系でプロテスタントの信仰を持つ先住のアメリカ白人（旧移民）に比べ南・東欧からの新移民は「遺伝的資質が劣る」と考えていたが、アメリカという（メルティングポット）の良好な環境のなかで学習と適応をとおして優れた遺伝的資質を後天的に獲得しアメリカ化することで、先住のアメリカ白人に近づくことができると信じていた。さらに彼はこの「アメリカ化」のプロセスは良好な環境のなかでなされなければならないし、しかも厳格な規律で統

御されていなければならないと考え、連邦政府、地方自治体、民間企業、公立学校、セツルメント運動などが運営するアメリカ化プログラムにその機能を期待した。ローズヴェルトの「上からのアメリカ化運動」は、新来移民がアメリカに適応同化するためには、できるだけ速やかに母語と故国の文化を捨て、英語とアメリカ的な生活習慣と価値観を習得することを半ば強制的に移民に迫るものであった。

しかしながら、第一次大戦下でアメリカ化運動による移民に対する同化圧力が強まった結果、これに対する反作用として、二人の哲学者、すなわちユダヤ系知識人のホーレス・カレンとランドルフ・ボーンによる多元主義の立場から根元的な異議申し立てがなされることになる。彼らの主張はアングロサクソンの主流文化を相対化することで、多元性に基づいた新たなアメリカのあるべきビジョンを提示したという点できわめて大きな意義を持っていた。ところが、思想界に大きなインパクトを持つことが期待された彼らの主張は、一部の知識人を除いて広く受け入れられることはなかった。彼らの主張が受け入れられなかった理由の一つとしては、第一次大戦下にあった当時のアメリカ社会では、戦時ヒステリーともいうべき熱狂的なショービニズム（排外主義的な愛国主義）が当時のアメリカ国内で支配的になっていたことがまずあげられる。しかし、カレンらの文化多元主義の主張が広まらなかつたもう一つの理由として、カレンらの思想に内在する根源的な問題があったことをあげなければならない。これについてはのちに詳しく論じることにしたい。

公民権運動の隆盛とエスニシティの覚醒

右に見たように、カレンらの文化多元主義の影響は一部の知識人のあいだにとどまり、その後広まりを見せることがなかった。ところが、第二次大戦後の二〇世紀半ばに入ると、一時忘れられていたカレンらの文化多元主義は復活し、大きな影響力を持つことになる。その契機となったのが、一九五〇年代から六〇年代にかけて南部の黒人のあいだで盛り上がった公民権運動であり、それに触発された一九七〇年代のエスニシティの覚醒と呼ばれる現象であった。このような動きのなかでエスニック・マイノリティの自己主張の声が高まりを見せ、ワスプの支配的価値への同調を強制するアングロ・コンフォーミティ論、あるいはアメリカは人種およびエスニック・グループの（るつぽ）であり、そのなかですべての人種・民族は溶けて新しい人間、すなわちアメリカ人になるとするメルティングポット論に代わって、各エスニック・グループは多様な固有の文化的遺産を保持しつつ、アメリカ社会の発展に寄与すべきとする多文化主義が説得力を持つようになったのである。長いあいだ社会の片隅で貧困と無知に苦しんでいたマイノリティ・グループのなかから、大学教育や専門的な訓練を通じて多くの指導者が生まれ

たこと、また彼らの政治面での組織化が進んだことなども、多文化主義の隆盛に拍車をかけた要因としてあげられる。いまや〈メルティングポット〉は同化主義を連想させるネガティブな、さらにいうならダーティーなシンボルへと転じ、替わりに〈サラダボウル〉、〈モザイク〉、〈虹〉、〈万華鏡〉〈オーケストラ〉といった隠喩が、アメリカ社会の多様性を表わす新たなシンボルとして使われるようになったのである。

〈メルティングポット〉のなかでエスニシティは溶けていなかった

一九〇八年にイズレイル・ザングウィルの戯曲『メルティングポット』はワシントンでの初演に引き続き、翌年にはシカゴで六カ月間のロングランを果たし、ニューヨークのブロードウェイでの公演はなんと一三六回にもおよんでいる。これによって〈メルティングポット〉という同化モデルは、アメリカのシンボルあるいはメタファーとして瞬く間に全米に普及し人口に膾炙するようになった。その後一九三〇年代に初期シカゴ学派の社会学者たちによって社会学的同化理論として発展をとげ、一九五〇年代にはすっかり定着したように見えたが、ネイサン・グレイザーとダニエル・モイニハンという二人の社会学者の経験的な調査に基づく『人種のるつぼを越えて』(一九六三)の出版によって、この同化モデルは全面的に否定されることになる。メルティングポット論が描くビジョン、すなわちアメリカにおけるエスニック・グループや宗教グループが〈メルティングポット〉のなかで融合してアメリカ人やアメリカ的文化という同質的最終産物となるという考えは、長く存在したあげく、その信頼性を失ってしまったのである。他方、やがては消滅すると期待されていたエスニシティを示す事実は存続していることが明らかになったのである。グレイザーらは次のようにメルティングポット論をばっさり切り捨てている。「〈るつぼ〉に関する重要な点は、それが、起きなかつた、ということである。少なくともニューヨークにおいては、また必要な変更を加えたとして、アメリカのニューヨークに似た地域においては。」

〈メルティングポット〉復活の動き

以上見てきたように、シンボルとしては圧倒的なインパクトと強力なイメージ喚起力を持つ〈メルティングポット〉ではあるが、その反面において同化の理論としては多くの誤解や攻撃を招く多義性(曖昧性)を内包していたため、その後歴史学者や社会学者からの批判を次々に浴びることになる。しかし皮肉なことに、一九七〇年代後半になって過度のエスニシティ礼賛熱が冷めていくにつれ、歴史家や社会学者のあいだで、同化を強力で社会的に望ましい傾向として再評価する動きが目立つようになってくる。このような同化理論再評価、あるいは〈メルティングポット〉復活の動きについて、アメリカ移民史研究の泰斗ジョン・ハイアムは次のよ

うに語っている。「同化とは喪失の過程であるとする説、一九七〇年代初頭にはあれほどまでに一世を風靡したこの説は、同化をむしろ獲得の過程であると見る学者たちからの挑戦にふたび直面したのである²。」

社会学者のスタインバーグもまた、一九八〇年代の冒頭に公表された論文で、一九七〇年代のアメリカでエスニック・リバイバル現象が盛んになり、多文化主義が説得力を持つようになったにもかかわらず、過去一世紀のあいだにアメリカ社会に生じた変化を見ると、〈メルティングポット〉が依然として作動していることを認めざるをえないとし、次のように述べている。

母語の喪失とその他の移民文化の核心的諸要素の喪失、移民コミュニティの拡散、過半数世代にわたって見られたかなり大きな経済的・社会的移動、エスニック文化の侵食と萎縮、かつてエスニシティを支えていた宗教の衰退、多様なエスニシティ、下位社会の文化的収斂、異なるエスニック・グループ間および異なる宗教間のインターマリッジ（交婚）がますます増大しつつあること——過去一世紀のあいだにアメリカのエスニック・グループのあいだに起こったこれらの大きな変化を考慮すると、われわれは過去数十年にわたって〈メルティングポット〉が働いているのを目撃しているとする結論を避けることはできない³。

さらに、一九世紀から二〇世紀を通じてアメリカへの移民の受け入れ先はヨーロッパに偏っていたが、一九六五年の移民法（ハート・セラ法）で移民選抜の基準がヨーロッパ白人を優先する人種主義的な基準から適性を優先するより普遍的な基準に按えられたことにより、その後二〇世紀末から二一世紀にかけてアジア、ラテンアメリカ、カリブ海からの移民が急増している。これはアメリカ移民史における第三の大波である。その結果、アメリカ合衆国の総人口にヨーロッパ系白人人口が占める割合が減少したのと対照的に、非白人人口の割合はいちじるしい増加傾向が見られた。合衆国勢調査に基づいた人口動態予測によれば、近い将来アメリカの人種民族構成が大きく変わることが予想され、二一世紀半ばまでには長いあいだアメリカのマジョリティの座を占めてきたヨーロッパ系白人人口が総人口の五割を割り込むことが明らかになったのである。

古典的同化論の批判的検討と新同化論構築の試み

一九七〇年代以降、多文化主義がメルティングポット論にとって代わったかのように思われた時期があったが、その後多文化主義の行き過ぎが抱える陥穽や問題点が次第に明らかになる

ことで、同化理論の批判的再構築の試みや（メルティングポット）の復活に言及する動きが一九九〇年代以降社会学者を中心とした研究者のあいだで見られるようになる⁴。ただし、（メルティングポット）の復活といっても、そこで求められるべきは旧来のメルティングポット論に見られたような、新来の移民グループやマイノリティ・グループに一方的な同化を強制する同化主義ではなく、エスニシティに基づく多様性に基礎をおいた強制なき「柔らかな同化」でなければならないことは強調しておきたい。現代アメリカの人種・民族の多様化によって古典的同化論が「時代遅れ」なものになっているとの批判に応えるために、それが抱えている問題点はどこにあるかを明らかにする。

ニューカマーの同化に関する二つの見解

二〇世紀末から二一世紀初頭にかけてアメリカに押し寄せつつある現代のニューカマーとその子孫（第二世代、第三世代）の同化をめぐる、移民研究者のあいだで見解が大きく二つに分かれている。第一の見解に立つ研究者は、アメリカにおけるニューカマーとその第二世代である子どもたちのメインストリームへの編入のプロセスを社会的に分析する道具として、同化モデルが依然として有効であるとの認識に立つ。この見解をとる研究者たちは、伝統的な同化理論を批判的に再検討することで、人種民族構成がきわめて多様化・複雑化した現代アメリカのエスニック状況に適合的な新しい同化理論（新同化論）の再構築を試みている。これは、一九九〇年代に入ってから現代アメリカの移民研究者のあいだで盛んになったものである。

新同化論者と呼ばれるこれら社会学者を中心とする移民研究者たちは、かつて一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて南・東欧から大挙して米国に押し寄せた貧しい移民の群と同様、現代のニューカマーもその大勢は長い目で見れば同化に向かっているとの立場をとっている。彼らがその論拠としているのは、次のような歴史的事実である。すなわち、二〇世紀初頭の南・東欧からの移民たちは、移住当初こそネイティブイズムと呼ばれる激しい移民排斥運動に直面しアメリカ社会の底辺に位置づけられていたが、その後世代交代を繰り返すうちに漸進的に上昇移動をとげることに成功し、第三世代までにはほとんどの移民グループが中流の仲間入りを果たし、結果としてアメリカのメインストリームに編入されている。

このような新同化論のやや楽観的と思われる見通しに対して、キューバ系社会学者のポルテスとルンバウトは異議を唱えている。彼らの見解によれば、現代の新来移民の第二世代、第三世代がアメリカ社会に適応しメインストリームに統合されるためには、二〇世紀初頭の移民の子どもたちとは比較にならない多くの機会と同時に大きな危険をもたらす多様かつ複雑な環境に立ち向かわなくてはならないという。ポルテスらも今日の移民を研究するにあたって同化が

依然として基本概念であることは認めているが、今日の同化のプロセスはきわめて多くの予測不可能な偶有性と、あまりにも多くの変数による影響を受けるため、同化が一樣かつ直線的に進むとする伝統的な直線的同化モデルは同化の社会学的分析の枠組みとしては問題があり、今日の移民の第二世代は分節化セグメンテッド・アセンションされた同化のプロセスをたどっているのがより妥当な見方であると主張している。この分節化された同化モデルによれば、現代の新来移民の同化は、移民グループによってそのプロセスと適応結果はそれぞれ異なり、上昇移動を遂げることでアメリカのメインストリームに急速に統合されるというパターンは、あくまでも可能な選択肢の一つに過ぎないということになる⁵。

以上見てきたように、現代の新来移民の第二世代、第三世代の同化をめぐっては、残念ながら未だ研究者のあいだで必ずしも見解の一致が見られてはいない。本書で筆者が明らかにしたいと意図したのは、二二世紀のアメリカ移民の同化理論として最も説得的であると思われる見解は何かを探究することにほかならない。

プロローグ注

- (1) アメリカ移民の同化をめぐるこれら三つのパラダイムについては、次を参照。シルトン・M・ゴードン著／倉田和四生・山本剛郎訳『アメリカンライフにおける同化理論の諸相——人種・宗教および出身国の役割——』晃洋書房、二〇〇〇年。
- (2) ジョン・ハイナム著／斎藤眞・阿部齊・古矢旬訳『自由の女神のもとへ——移民とエスニシティ——』平凡社、一九九四年、一一頁。
- (3) Stephen Steinberg, *The Ethnic Myth: Race, Ethnicity, and Class in America*, Beacon Press, 981, p. 73.
- (4) 〈メルテインズポット〉の復活に言及して「その」としては、次の文献がある。Rudolph J. Vecoli, “Return to the Melting Pot: Ethnicity in the United States in the Eighties,” *Journal of American Ethnic History*, Fall 1985. Edward Kantowitz, “Ethnicity,” *Encyclopedia of American Social History*, eds, Mary K. Cayton, Elliott J. Gorn, and Peter W. Williams, Vol. 1, 1993. Michael Barone, *The New Americans: How the Melting Pot Can Work Again*, Regnery Publishing, 2001. Richard Alba and Victor Nee, *Remaking the American Mainstream: Assimilation and Contemporary Immigration*, Harvard University Press, 2003.
- (5) Alejandro Portes and Ruben Rumbaut, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generations*, University of California Press, 2001, p. 45.